未来につなぐ ふくい魅える化プロジェクト

福井の魅力と、未来をつくる

make.fUKUI WONDERS

号外

『make.fUKUI WONDERS 号外』 発行日：2018年2月28日
発行元：福井市　監修：株式会社リ・パブリック、株式会社福井新聞社
編集ディレクション＆編集：MUESUM（多田智美、妹尾実津季） アートディレクション＆デザイン：UMA/design farm（原田祐馬、西野亮介） 撮影：片岡杏子

XSCHOOL パートナー企業座談会

XSCHOOLから見える、福井のまちの可能性

荒井章宏
荒井 株式会社 社長
×
多田健太郎
株式会社 米五 常務
×
田中陽介
株式会社 タッセイ 副社長

福井で培われた文化や風土を紐解き、社会の動きを深く洞察し、新たな事業・プロジェクトを生み出すXSCHOOL。去る1月21日に東京、2月3日には福井で、2期生21名7チームによる発表会を開催、大盛況のうち、それぞれのプロジェクトがスタートを切りました。『make.fUKUI WONDERS号外』では、パートナー企業として約120日間のプログラムに伴走した荒井株式会社・荒井章宏社長（写真左）、株式会社米五・多田健太郎常務（写真中央）、株式会社タッセイ・田中陽介 副社長（写真右）に、XSCHOOLをふりかえり、そこから見えた“福井のまちの可能性”についてお話いただきました。

―― 約120日間のプログラム、発表会とおつかれさまでした。XSCHOOLをふりかえって、いかがでしたか？

荒井：あっという間の濃密な120日間でしたね、個人的にもとても刺激的な体験になりました。当初は「何か我が社の新商品が生まれるのかな？」と淡い期待を抱いていましたが、「おや、どうも違うぞ」と（笑）。プロジェクトを立ち上げようと試行錯誤する受講生、講師陣、私たちがともに議論しながら切磋琢磨できる場でしたね。

多田：XSCHOOLを伝えるのは難しいですよね、発表会を見ただけでも伝わらないし。今回私たちも全プログラムへの参加が半強制的に求められていたことは良かったです。議論を重ねてアイデアを提案しては、講師陣に論破され、ひっくり返されるという受講生の姿をそばで見ていたからこそ、本気で向き合わないと！という気持ちにもなったし、それだけ得るものも大きかった。

田中：弊社は私含めて3名の若手社員で関わりました。改めて、福井にXSCHOOLがあることは驚異的だと思います。発表会の直前には、円陣を組んで、荒井さんの掛け声で「がんばるぞ！」「おー！」とみんなで気合いを入れたのですが、まるで舞台の幕が上がる直前のような、あの何とも言えない緊張感と高揚感が入り混じった感覚を思い出しました。あの高揚感は仕事でも、なかなか味わえないですよ。1期生も毎回駆けつけていましたが、あれはクセになる（笑）。XSCHOOLには、いつも心地よい緊張感と高揚感に満ちてましたね。

多田：私たちも、きっとパートナー企業2期生として、来年のXSCHOOLにも顔を出していると思います（笑）。

荒井：そうですね（笑）。発表会でも、ゲストからの評価をもらうことがゴールではなく、ここから新しい福井を築いていくんだという期待感に溢れていました。

―― それぞれの立場から、このプロジェクトの魅力についてお聞かせいただけたらと思います。

田中：僕はパートナー企業間のつながりにも魅力を感じています。「XSCHOOLの熱に惹かれる企業」という共通の立場だからこそ、この距離感で話せる関係になれた。

荒井：そうですね。異業種交流会や勉強会だと、名刺交換や表面的なつきあいで終わることも少なくありません。でも今回XSCHOOLというコミュニティに入り込むことで、同じ立場の企業として共感できたんだと思います。

多田：最後に受講生へのサプライズで、越前がにを準備してふるまったのですが、3人揃って海に潜ってきたかのような演出で、シュノーケルをつけて、「獲ったどー！」ってやったんですね（笑）。パートナー企業同士の距離がこんなに縮まるなんて、思ってもみなかった！

田中：なぜこんなことが起きるのか考えてみると、やはり受講生がいろんなものをかなぐり捨ててでも必死に何かをつくり出そうとする姿が頭をよぎります。その空気がとにかく応援しなきゃという気持ちにさせてくれた。

荒井：僕たちがパートナー企業を引き受けたのは、企業や業界に蔓延する予定調和な状況に危機感を覚えたからなのかもしれません。これまでの伝統を引き継ぎつつ、新しい風を吹き込んでいきたいという気持ち、また味噌だけ、シルクだけ、建材だけなく、同じ福井に育まれた企業として、地元の未来を真剣に考えてくれる受講生や講師陣とともに福井で何かを起こしたいという気持ちが集まり、熱を生んでいたように思います。

多田：「うちはこんな企業で、こういう素材があるので、あとは考えてね」と受講生との間に線を引くのではなく、悩む姿に寄り添う関係性がありましたね。

荒井：だからこそ、僕たちも受講生から力をもらうことができたし、そこで見つけた気づきを自社や業界に落とし込んでいきたいと思うようにもなった。

田中：あと僕たちの世代が近いということも良かったんだと思いますね。父親世代だと横のつながりを持つという意識も薄いように感じています。後継者にあたる僕たち世代の経営者は、全国の同業者とネットワークを組み、意見交換をしながら互いに良いところを真似しあい、情報や先行事例のシェアをしています。親世代から見ると、不思議な状況かもしれません。でも知識や技術を隠すより、分かち合う方がより多くの情報が入り、より良い状況が生まれると感覚的にわかる。

荒井：僕もこれからの時代は、縦横斜めで連携していく必要性を強く感じています。福井は日本有数の繊維産地であり、分業型です。つまり、生産の一部を担う企業が廃業すると、産地全体の機能が失われてしまう。ものづくりを担う企業が継続できる状況をつくっていかないと、気づけば、産地が産地でなくなる可能性もあるんです。産地を守るという意味でも、これからは知見をオープンにし、共有することが大切だと思います。今回受講生からの疑問に応えるべく、繊維のつくり方や歴史を紐解いていくことで、改めて業界について考えるきっかけになりました。また、うちは福井に育てられ、地元に生かされている企業なんだと気づかされましたね。

―― プロジェクトを立ち上げる受講生たちに伴走するなかで、気づいたことや変化はありましたか？

多田：会社にどういう影響があるかはわかりませんが、私自身の変化は大きいです。XSCHOOLの魅力は、熱い想いをもった受講生が、福井を舞台にゼロからプロジェクトを立ち上げるということ。うちは約350年前に先祖が創業しました。でも僕は新規事業を考えることはあっても、ゼロから何かを生み出す経験は少ないんです。受講生が悩みもがく姿を見て、「あぁ、創業当時もこんな感じだったのかな」と、とても感慨深かったです。

荒井：そうですね。うちも祖父が創業していて、「継承する」という気持ちが強いです。福井には、そういう企業も多いと思います。生みの苦しみに立ち会うことで、改めて先代の想いを想像する貴重な経験にもなりました。

田中：今回、社員も僕と同じような気持ちで、会社や仕事のためではなく、自らの好奇心から積極的に参加していたのは嬉しかったですね。刺激的な学びや出会いの多い場を楽しみ、うまい酒を飲み交わして、僕よりも受講生と親交を深めていて（笑）、心強く感じましたね。おもしろい個人の集まりが、会社の魅力を強めていく。そう考えると、多田くんに変化があったということは、会社にもきっといい影響があると思いますよ。

荒井：XSCHOOLは、新商品開発の場でもなければ、衰退しつつある産業を救う場でもない。企業の魅力を通して、私たちも知らない福井の魅力を見つけるプログラムだと思います。受講生が「なぜ福井で絹織物産業が150年近く続き、礎を築くことができたのか」と調べるうちに、歴史や風土、産業、文化へと視野が広がっていく。潜在的な企業の魅力を掘り下げることで、福井人らしさ、また福井らしさが浮かび上がってきました。

田中：XSCHOOLは、福井の企業、まちが変化できるかもしれない可能性を秘めた場だからこそ、僕たちも惹かれるし、ともに高揚するし、自分ごととして一緒に何かしたい、応援したい気持ちになるんでしょうね。

荒井：XSCHOOL、これからも25年は続けてもらいたいですね、そしたらうちの息子も参加できますし（笑）。

田中：こういうことを楽しめる経営者はまだまだ福井にいると思うし、ぜひ挑戦してほしいですね！　人が変わると企業が変わり、企業が変わると福井も変わっていく。これからどんな展開が生まれていくのか楽しみです。

［聞き手・文：多田智美（MUESUM）／2018年2月4日、二ノ丸グリルにて収録］

荒井 株式会社　www.arai-silk.co.jp
明治時代より続く福井の伝統産業・絹織物（＝シルク）に特化した産元商社。和装用羽二重織物やアパレル向け服地、スカーフ用生地はじめ、近年は産業資材用生地や機能性素材の加工技術開発にも取り組む。

株式会社 米五　www.misoya.com
天保２年（1831年）創業。厳選した国産米、国産大豆、塩を使った昔ながらの味噌づくりを継承する。永平寺御用達店として日夜修行に励む雲水らの貴重な蛋白源としての味噌蔵を預かってきた歴史をもつ。

株式会社 タッセイ　www.tassay.co.jp
“「建てる」を応援する会社”として、住宅用建築資材の販売・納入と大型ビルなどの内装工事を行う。北陸一の専属施工集団「タッセイ職友会」を有し、資材調達から工程・品質・安全の管理を一貫して担う。

XSCHOOL FUKUI とは……

2016年秋、福井市にて開校した次代のデザイナーのための小さな教室です。あらゆる分野・枠組みを横断し、物事を再編集し、新たな価値を生み出す「広義のデザインの力」を養う、実践的プログラム。2期目となる2017年度は、福井を拠点とする分野の異なる3社の企業をパートナーに迎え、さまざまなデザイン領域を横断して活躍する講師陣、事業家アドバイザー、ゲストが受講メンバー21名に伴走してきました。東京、大阪、福井などから集まった、専門性もバックグラウンドも異なる受講メンバーは、3人1組のチームで対話と実験を繰り返し、福井に根づく文化や風土を紐解き、社会の動きを洞察し、7つのプロジェクトを構想しました。

開講期間：2017年9月30日-2018年2月3日　受講生：21名　パートナー企業：荒井株式会社、株式会社米五、株式会社タッセイ　講師：原田祐馬（デザイナー、UMA/design farm代表）、萩原俊矢（Webデザイナー）、高橋孝治（プロダクトデザイナー）事業化アドバイザー：山口高弘（GOB Incubation Partners株式会社代表取締役） プログラムディレクター：原田祐馬 ※講師と兼任、多田智美（編集者、MUESUM代表）、内田友紀（株式会社リ・パブリック共同代表）

2017年度・2期生から生まれたプロジェクトの一例

ものらく座　“ものづくりの魅力”を落語で体感する新しい座

受け手の想像力を刺激し、笑っているうちにその世界に引き込んでいく“落語”を通して、ものづくりの裏側にあるつくり手の技やあふれる熱量を伝えるプロジェクト。ものづくり産地・落語家とともに創作落語や物語性のある商品を開発し、もの・産地への愛着をゆるやかに生み出します。

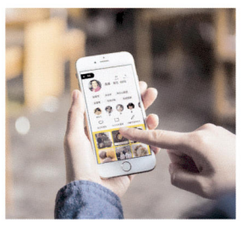
今飯田佳代子／会社員（メーカー）　千葉県出身→千葉県在住
横山絵理／信楽地域おこし協力隊　鹿児島県出身→滋賀県在住
安井利彰／デザイナー　福井県出身→福井県在住

めおとみそ　おいしい対話を通して、二人の味を見つけるキット

食事の味つけ、靴下の畳み方、洗濯洗剤の種類など、大切な人とともに暮らしてはじめて気づく、小さな“すれ違い”。それぞれの家庭の味がある「食」、なかでも地域によって味の違いが大きい「味噌」に焦点をあて、おいしい対話を通して、二人の味を見つける“胃袋のすり合わせ”を提案します。

津田康平／会社員（鉄道）　岡山県出身→福井県在住
土田佳奈／福井ゲストハウスSAMMIE'Sスタッフ 福井県出身→福井県在住
古澤敦貴／コピーライター　愛知県出身→大阪府在住

OYADORI　自撮りもいいけど、たまには親撮り



孫世代の視点から高齢者とのつきあい方、バトンの受け取り方をリデザインする「孫の手舎」による第一弾企画。両親や祖父母の日常の姿、家庭の味、我が家の定番など、ささやかながら大切な家族の文化資産を、息子・孫・いとこたちがともに記録し、家族・親族間で共有できるアプリです。

清水一史／会社員（不動産）　福井県出身→東京都在住
濱見彩映／NPO団体職員　大阪府出身→福井県在住
藤井正雄／UXデザイナー　佐賀県出身→神奈川県在住

未来につなぐ ふくい魅える化プロジェクト make.fUKUI
2017年度に実施したXSCHOOL以外のプロジェクト

夏の日本海トライアルステイ
自然豊かな沿岸部の越廼地区を拠点に、福井で働く・暮らすを体験できる都市圏在住者対象の「お試し居住」プログラム。東京でオンライン農学校を運営するデザイン会社・コズは、越廼地区周辺の越前水仙農家や福井市特産のサツマイモである越前金時の生産者などを取材し、その様子をレポート記事にまとめ、web上で配信。また大阪・東京を中心に海外にも複数の拠点を持つデジタルマーケティング会社・TAMは、越廼中学校で地区のPR活動に取り組む生徒に情報発信の授業を行い、同校と交流を深めるなど、都市圏の企業と地域の新たな関わり方を実験する場となった。

実施期間：8月-10月　参加企業：コズ株式会社、株式会社TAM

福井キャンプ
慶應義塾大学・加藤研究室の学生21名が、福井で暮らし、働く9名にインタビューを実施し、その人やまちの魅力を伝えるポスター、ビデオを制作。発表会には市民約30名が駆けつけたほか、ポスターは同研究室の「フィールドワーク展XVI いろんなみかた」（2/3-5横浜市）でも展示された。

実施期間：10月-2月　参加者：慶應義塾大学加藤文俊教授、加藤研究室学生

未来につなぐ ふくい魅える化プロジェクト make.fUKUIは、「福井でつくろう、福井をつくろう」をテーマに、まちの魅力や価値の可視化を通して、地域を超えた“新たな人の流れの創出”を目指し、2016年に始動したプロジェクトです。世代や地域を超えたたくさんの人が行き交い、これからの暮らしや働き方、関係性を育む未来の地域のあり方を、この福井市を起点に実践し、発信しています。（実施主体：未来につなぐ ふくい魅える化プロジェクト / 主宰：福井市 / 協力：福井大学産学官連携本部、株式会社福井銀行、株式会社福井新聞社 / 運営：株式会社リ・パブリック、株式会社福井新聞社）

http://makef.jp/